

「個・孤の時代」の情報管理 ③

K 夫さん（83）と S 子さん（81）夫婦には子供はいません。S 子さんは子供が出来なかったという負い目を感じていたようですが、K 夫さんは家庭を守ってくれた S 子さんに対し、定年退職後には感謝の気持ちを言葉で表す代わりに、頻繁に旅行に連れ出すなどして、何不自由なく悠々自適な老後を過ごしていました。



しかし、数年前から S 子さんに認知症の症状が見られるようになりました。K 夫さんは、そんな S 子さんの認知症を「世間体が悪い」「恥ずかしい」と感じ、S 子さんと一緒に外出することを避け、S 子さんを家に閉じ込めるようになってしまいました。

S 子さんには身体の具合が悪いとことはどこもなかったため、K 夫さんは S 子さんのために介護保険を利用することもせず、ひとりで食品スーパーに買い物に行き、初めての家事に孤軍奮闘をしながら、それが S 子さんを守ることだと信じていました。

S 子さんは、一切外出しなくなって数年経った頃には、意味ある言葉のキャッチボールも出来ないほど認知症が進んでしまいました。ある日、K 夫さんが買い物に出かけた先で急な脳梗塞で倒れ、救急搬送されてしまいました。K 夫さんはその後、意識はあるものの発語もできず、判断力を喪失した状態で療養を続けなければならない状況となりました。

自宅に閉じこもっていた S 子さんが、餓死寸前の状況で発見されたのは、K 夫さんが救急搬送されてから5日後のことでした。

K 夫さん S 子さん夫婦のその後の療養や支援は困難を極めました。自宅の状況から、この夫婦が経済的には余裕があることは見て取れますが、K 夫さん S さんご夫妻は、近所付き合いもほとんどなく、それぞれの兄弟姉妹とも距離を置いていたので、病院も自治体も地域包括支援センターも、このご夫妻の今後の療養や生活について必要な情報が何一つ得られませんでした。

年齢の割にパソコン操作も得意だった K 夫さんは、銀行の紙の預金通帳からすべてネット通帳に切り替えていたため、支援者たちが自宅の中から金融情報を見つけようとしても、その手掛かりすらありませんでした。医療の情報も親族の情報も見つけれません。

元気なときには個人情報への意識が人一倍高かった K 夫さんですが、認知症のため質問に答えられない妻の S 子さんの目の前で、何かしらの情報を得ようと自宅の家捜しをされる状況になることは、まったく想像していなかったのかもしれない。

多世代の家族が当たり前前に頼りあっていた時代には、家族内の情報というのは、家族であればもともと知っているか、家族であれば後からでも簡単に知り得るので、その管理や伝達についてはさほど意識せずとも困ることはなかったことでしょう。

今は違います。大切な情報を最後のその先まで、自分自身で管理して適切に利用できることはないのだということを自覚して、大切な情報を個人でしっかり管理するとともに、適切に使う権限のある誰かに、適切に託しておくことが必要です。 つづく